

# 引用・参照した文献の書き方

江口某

2020年5月7日

この文書を参照・引用する場合は、文献表では以下のようにすること。  
江口某(2020)「引用・参照した文献の書き方」、京都女子大学講義資料、2020年  
5月版

大学のレポートでは、しっかりと先行研究を調査し、引用・参照を正しくおこなう必要があります。以下では、とまどいやすい文献の表記方法について説明します。

## 1 文献参照の目的

参照した文献を正しく表記する必要があるのは、読者がすぐに確認しやすいようにするためです。読者は、参照されたものを確認したり、自分でも読んで研究したくなるので、図書館などですぐに入手できるような情報を提供します。

具体的には、(1) 著者・編者、(2) タイトル、(3) 出版者・出版形態、(3) 発行年の四つがそろえば資料を同定し見つけだし確認することができます。したがってこれらを表示すればよい、ということになります。

ただし、この四つの順番の表記方法や記述の順番がばらばらだったりすると混乱しやすく、また見苦しいので、一定のルールにしたがって配列する必要があります。この並べ方や表記方法に、学問分野や著者それに雑誌・出版社による揺れ、つまり細かい違いがあるので面倒なのです。それぞれの雑誌や出版社が細かい規則を決めて「執筆要綱」(ルール)のようなものを作成し、それにしたがって雑誌や書籍全体で統一するのが通例です。この文書の最後に、京都女子大学現代社会学部の紀要『現代社会研究』の執筆要綱の一部を掲載します。

さて、基本的なことだけはおさえておきましょう。著者、タイトル、出版者、発行年の四つを並べる順番は、おもに二つの流儀があります。

A (1) 著者、(2) タイトル、(3) 出版社・掲載雑誌、(4) 発行年

と発行年が最後に来るタイプと、

B (1) 著者、(2) 発行年、(3) タイトル、(4) 出版社・掲載雑誌

のように発行年が2番目に来るタイプです。前者は人文学や法学などの文献で使われることが多く、後者は、経済学や社会学などの社会科学や、自然科学などで多く見られます。一般向けの雑誌や新聞などでは著者よりもタイトルを先に表示することがありますが、アカデミックな書き方ではありません。

後者の著者と出版年を先に書く流儀は Author – Year (著者・年) 型と呼ばれ、最近ではアカデミックな世界で主流になっており、現代社会学部の紀要でも採用されています。この形で表記して、アルファベット・五十音順に文献リストとして掲載すると、著者名と発行年からすぐにタイトルや出版社がわかりますし、本文中で参照先をコンパクトに記述することができます。現代社会学部のレポート・卒論では、特別な指示がないかぎり、末尾に掲載する『現代社会研究』執筆要綱の流儀で文献を記載すれば問題ありません。

具体的には次のようにします。本文中でたとえば次のような参照をおこないます。

哲学者の戸田山和久によれば、世の中には数えきれないほどの「論文の書き方本」があるという (戸田山 2012: 9)。

この文中での指示のしかたについては、実際には (戸田山 2012, 9 頁)、(戸田山 2012, p. 9)。などの書き方もあり、執筆要綱に従います。

そして、文献リストに次のように掲載します。

戸田山和久 (2012) 『論文の教室：レポートから卒論まで』, 日本放送協会出版。

以下、具体的な書き方のポイントや、学部生がわかりにくいだろうと思うことを解説します。

## 2 具体的な表記方法の注意

デザイン的な好みに関する細かいことは別にして<sup>\*1</sup>、基本的なポイントについては、**なぜそうするのかの理由を理解しておく**ことが重要です。

1. 著者が先頭であることを意識してください。なぜなら、学問的な資料や情報については、それを執筆・作成した人が誰であるか、言いかえれば情報源がどんな人であるかがもっとも重要な情報で、タイトルはそれに比較すれば重要ではないからです。「～という学者が～年に発表した文書である」ということがもっとも重要な情報です。
2. リストに掲載した文献の一部を本文中で参照する場合、(戸田山 2019, 19 頁) のように記載します<sup>\*2</sup>。姓、出版年、ページの順番です。フルネームで書く必要は通常ありませんが、同姓の人物が存在する場合はフルネームが必要になる場合があります。

---

<sup>\*1</sup> 実は細かい点については、好みの問題で学者どうし、あるいは執筆者と出版社の編集者などでケンカになることもあります。

<sup>\*2</sup> (戸田山 2019: 9) や (戸田山 2019, p. 19) のような表記もありえます。

3. 現在は通例、書籍（本）は『』で、書籍以外の論文や記事は「」でくくる慣例です。欧文の文献は書籍はイタリック体（斜体、*italic*）、論文は引用符（“と”）でくくることになっています。雑誌名も日本語のものは『』でくくり、欧文のものはイタリックにします。参照している文献が、**書籍なのか、雑誌や書籍のなかに収録されている論文であるかを見分けるため**です。
4. **著者名のあとに「著」は不要**ですが、編集者の場合は「編」をつけます。学問の世界では、「～という名前の人<sup>の</sup>論文」という指示があれば、基本的には「その人が書いた」と理解されます。書籍の編集は、執筆者を集めて調整や指導をしたということなので「編」をつけます。
5. 雑誌には「第3巻」や「第4号」のような番号（巻号）がふられています。一般に、1冊1冊の「号」を集めて、大きめの「巻」を作ります。たとえば1年に4回刊行される雑誌は、第3巻第1号、第3巻第2号～と番号を振り、1年分をまとめて「巻」とするわけです。ただし「巻」がなく「号」だけ、あるいは号がなく巻だけの雑誌も存在します。欧文雑誌の場合、Volume が巻、Number が号に対応します。巻号の表記方法はさまざまですが、雑誌『現代社会研究』の場合は、雑誌の第3巻第4号（= Volume 3, Number 4 = Vol. 3, No. 4）の場合、「3 (4)」と表記するよう指示されています\*3。
6. ISBN は通常必要ありません。出版都市名も最近は省略されることが多いようです。日本語の場合は考える必要がないでしょう。
7. 参照のためにページ表記が必要な場合は「123 頁」、複数の場合は「123-124 頁」のように書くのがよいでしょう。「p. 123」、「pp. 123-124」でも OK です。p. は page（1 ページ）の略、pp. は pages（複数ページ）の略で、**略した印に必ずピリオドをつけません**。「123P」「P123」「p. 123-124」は通常は誤りとされています。ページ番号であることが明らかな場合は「頁」も「p. / pp.」も省略してしまう場合もあるようです。
8. 読点などの入れ方はかなり細かく、編集者の好み等によって揺れがあります。読点やカンマをどこに入れるか、「、」と「,」のどちらを使うかなど、面倒ですね。最後に「。」や「.」を入れるかどうかなど、とても細かい世界がひろがっています。統一されていればどうでもいいように思われるのですが、とりあえず下の例にしたがってください\*4。
9. 発行年、出版社などは、日本語の書籍ならば本の一番最後のページつまり奥付<sup>おくづけ</sup>に記載されています。「第2版」「改訂新版」のような**版**の表示があれば、それも明記しなければなりません。版が違えば内容も違う、つまり内容を大きく変更したときに「版」を新しくします。「刷」は何回印刷したかを示すだけなので**記載する必要はありません**。また、たとえば「株式会社岩波書店」の株式会社は不要です。「岩波書店」で OK。
10. 文献リストは姓名の五十音順に並べます。欧文著者はアルファベット順で。翻訳された本のカタカナ名は五十音で並べてかまわないでしょう。ただし**外国人の姓と名を混同しないこと**。たとえばピータ・シンガーという学者について、「ピーターの主張に

\*3 でもしたがってない執筆者が多いようです。

\*4 実はこの執筆要綱自体ちょっと揺れていますね。

よれば～」と書かれると、「え、あのシンガー先生と友達なの？ どういう関係？」などと気になります。

11. 私見ですが、日本人の姓と名の間に空白入れる必要はありません。「徳川 家康」はおかしいと思う\*5。
12. 翻訳本も面倒なのです。下の『現代社会研究』執筆要綱ではアルファベットで記載していますが、学部生のレポートや卒論カタカナでもかまわないでしょう。自分で入手あるいは閲覧していない文献をリストに入れるのはおすすめできません。Author-Year で見つけやすくするために、姓を先にしてください。（くりかえしますが、外国人の姓名をまちがえないこと！ジョン・メイナード・ケインズはケインズが姓です。）

ケインズ, ジョン・メイナード (2008) 『雇用・利子および貨幣の一般理論』(上下), 間宮陽介訳, 岩波書店.

## 2.1 編集された本・論文集

面倒でまちがいがやすいのが、複数著者・編集者による文献や、編集された書籍に入っている論文です。たとえば次のような本があります。

嘉本伊都子・霜田求・手塚洋輔・中田兼介・中山貴夫・西尾久美子編 (2015) 『現代社会を読み解く』, 晃洋書房.

これは嘉本・霜田・手塚・中田・中山・西尾の5人の先生が編集した本です。こういうふうに著者や編集が多い場合は、本文などでは

嘉本伊都子他編『現代社会を読み解く』は京都女子大学の教員が執筆した教科書で、たいへん優れた現代社会の問題研究の手引きになっている～

のように省略して書いてもかまいませんが、**原則的に文献リストでは全員の名前をあげるのが正式です。**

さらに、こうした編集された書籍のなかにはいつている個々の論文や文章は、基本的にその個々の著者に文責があります\*6。そのため、文献として参照する場合も、原則としてその**個々の論文の著者とタイトルを明記**しなければなりません。

たとえば上の『現代社会を読み解く』に収録されている秋本勝「豊かと幸せ：GNHをめぐる」という論文を参照するには、嘉本他編の『現代社会を読み解く』の39頁、などで

\*5 つのだ☆ひろや、つくくみはそういう名前です。

\*6 たとえば、その文章がすばらしいものであれば、文章の内容について編集者ではなくその著者が賞賛されます。逆に、嘘の情報を書いたり、剽窃などの不正をしたらその著者が責任を問われます（この場合は編集者もちょっと非難されるかもしれません）。こういう事情で名前はとても大事なのです。

はなく、次のように書く必要があります。

秋本勝 (2015) 「豊かと幸せ：GNH をめぐって」, 嘉本伊都子・霜田求・手塚洋輔・中田兼介・中山貴夫・西尾久美子編 『現代社会を読み解く』, 晃洋書房, 39-52 頁.

こうすると、読者は、「ああ、秋本さんという学者が書いた文章なのだ」ということがわかります。編集者と書名と頁番号だけだと、実際に本を入手しないとこれが分からず不親切です。しっかり書きましょう。

## 2.2 ネットの情報はどうするの？

ネットにある情報を文献表でどう扱うかは、いまだに混乱しているようです。とりあえずのところ、『現代社会研究』執筆要綱にあるように、「作成者名・タイトル・URL・最終確認年月日を記す」ということになっていますが、一般にはいまだに安定していません。また、多くの学術団体がこうしたルールを定めた 1990 年代後半から時間が経過し、現在では時代に合わなくなっているという指摘があります。

たとえば、URL は頻繁に変更されてしまうために記録する実用性が低くなっています。また URL はどんどん長く複雑になる傾向があり、紙の媒体ではほとんど掲載する意味がなくなっています。Wikipedia の記事など、複雑で「%」だらけになってしまって用をなしていません\*7。官公庁の発表物など、どこにあるかが明確で検索が容易な場合は、URL はもはや必要ないかもしれません。

最終確認年月日も、あまりに煩雑になる場合は、論文の提出日前日などにすべての URL が有効であることを確認して、「以下ネット情報の最終アクセスは～年～月～日である」のように宣言してしまうのは簡便な方法でしょう。

また、私見では、かわりに**発表年月日**が重要になっているようです。官公庁、ニュース記事などは**発表日**を明記するべきだと思われまます。そうすれば URL などが変更されても読者がアクセスしやすくなります。最終確認年月日は、**発表日**がはっきりしていれば不要のではないかとさえ思われまます。こうしたことはまだ一般的にはなっていません。原則的には、下の執筆要綱の通り、「作成者名・タイトル・URL・最終確認年月日を記す」という約束をまもっていればよいでしょう。

文書や画像の引用のルール等は別項を参照してください。

## 3 現代社会学部紀要『現代社会研究』執筆要綱（抄）

現代社会学の紀要『現代社会研究』の執筆要綱の一部です。雑誌や書籍に文章を書く場合は、雑誌を発行する学会や、出版社から執筆者に対してこのような執筆要綱が配布されます。現代社会学部の学生は、なにも指示がない場合はこのルールにしたがっていただければ OK のはず（他に指示がある場合はそれにしたがってください）。

\*7 Wikipedia については、Wikipedia そのものが「Wikipedia:ウィキペディアを引用する」という提案記事を掲載しているので検索してみてください。

⑮ 本文および脚注において参照した文献は、すべて原稿の末尾にまとめて「参考文献」とし、下記の方法により記入する。

(1) 文献の配列は、和洋別とし、和文献は著者名のアイウエオ順、洋文献は著者名のアルファベット順とする。

(2) 文献の書き方は、次の要領にしたがう。

(a) 記述順序

図書：著者名、(出版年)、書名、版表示、出版地(洋書)、出版社、参照頁、(シリーズ名)、(ISBN)

雑誌：著者名、(発行年)、論題名、雑誌名、巻(号)、参照頁

(b) 区切り記号および文字

区切りにはカンマ(,)を用い、最後にピリオド(.)を打つ。洋書の出版地と出版社はコロン(:)で区切る。

- 欧文の著者名は姓を先に書く。共著の場合はアンド(&, and)で結ぶ。日本語の書名(書誌名)の前後には(『』)、論文名の前後には(「」)をつける。

- 巻、号、頁、発行年などの数字は、原則としてアラビア数字を使用する。☆欧文雑誌の論文名の最初と最後には、(“”)をつける。

☆冠詞、前置詞、接続詞(文頭以外)を除く各語の初字は大文字とする。

☆欧文の書名および雑誌名は、イタリック体にするため、原稿には赤字で下線を引くこと<sup>\*8</sup>。

(c) 記述例

- 図書

和書： 柏木博(1993)『ユートピアの夢：20世紀の未来像』未来社，135-138頁。  
翻訳もの： Keynes, J. M. (1936) *The General Theory of Employment, Interest and Money*, London: Macmillan (塩野谷九十九訳『雇傭・利子及び貨幣の一般理論』東洋経済新報社，1941年)。

- シリーズもの

細野昭雄、畑恵子編(1993)『ラテンアメリカの国際関係』新評論，133-145頁(ラテンアメリカシリーズ3)。

- 洋書

Unger, Danny & P. Blackburn (1993) *Japan's Emerging Global Role*, Boulder: Lynne Rinner Publishers, pp. 158-160 (ISBN1-55587-387-1)。

- 雑誌論文

雑誌名は、省略せず、完全誌名を記述する。ただし、欧文誌名は、国際的な慣行にしたがって略記してもよい。

国内雑誌： 大久保史郎(1993)「戦後政治・社会過程と憲法」『法律時報』65(11)，68-70頁。

欧文雑誌： Chan, Kalok (1993) “Imperfect Information and Cross-Autocorrelation Among Stock Returns”, *J. Finance*, 48 (4), pp. 1211-1230.

⑩ Web 上の情報は、作成者名・タイトル・URL・最終確認年月日を記すこと。画像等は作成者から使用許可をえること。